

はじめに

「元初まりの話」は、人間世界創造の話であるとともに、人間救済のために明らかにされた真実の話でもある。この話にはさまざまな水域棲の動物たちが比喩的に登場する。それらは現存する動物であったり、想像上の動物であったりするが、そのこと自体は特に問題ではない。

ただ、親神による十全の守護と「元初まりの話」に登場する個々の動物との間に、どのような関係があるのか、とくになぜ教祖は私たちに特定の動物たちを示されたのか、なぜこの動物なのかなど、これまで比喩的に示された動物たちの視点からの研究・論考は少ない。

たとえば、教内では一般に、男雛型「うを」は義魚、岐魚、鯨魚、ギギをイメージすることが多い。基本は「魚」のイメージである。はたして、教祖は本当にそのような意味で「元初まりの話」を仰ったのか。

筆者は、「うを」は「魚」のイメージではないとする先行研究をすでに発表した⁽¹⁾⁽²⁾、本稿ではそれらを踏まえた上でさらに加筆し、改めて水域棲動物の特定と十全の守護との関係をもより深めるため、この連載を始めることとした。

本稿では、明治15年以降に記された18篇の“こふき”資料に基づいて検証するが、登場する水域棲動物が当時どのような動物として認識されていたかを、動物学視点で検討・類推することを目的としている。そのため、「元の理」解釈に関わる学術的考察ではないことを、あらかじめご理解いただければ幸いである。

なお、この連載を続けるにあたっては、天理参考館元学芸員の上野利夫氏から、“こふき”資料の解析・解釈における有益な助言を事前にいただいている。ここで、改めて謝意を表する次第である。

“こふき”資料の分析と方法

「うを」の解析にあたっては、以下に示す18篇の“こふき”資料を分析した。

- ①山田本 「古記」と題する15年本
- ②榊井本A 「神代の古記」と題する16年本
- ③榊井本B 「神の古記」と題する16年本 (明治34年稿本)
- ④上田本 「神の古記」と題する16年本
- ⑤梅谷本 「神の古記」と題する16年本
- ⑥杉田本 「神の古記」と題する16年本
- ⑦不詳本A 「神の古記」と題する筆者不明の16年本
(天理図書館所蔵)
- ⑧不詳本B 「神之古記」と題する筆者不明の16年本
(天理図書館所蔵)
- ⑨今村本 「神之古記」と題する16年本
- ⑩喜多本 「神乃古記」と題する16年本
- ⑪江本本 「神乃実古記認文」と題する16年本
- ⑫宇野本 「おはなし」と題する16年本
- ⑬前川本 「神之古記」と題する17年本
- ⑭旧今村本 「神之古記」と題する17年本

- ⑮増井本 「神之古記」と題する17年本
- ⑯井筒本 「神代古記写」と題する17年本
- ⑰松尾本 「神之古記」と題する18年本
- ⑱鴻田本 「神之伝里記」と題する20年本

分析方法は、上記18篇に記されている「うを」に関する説明表現を抜き出し、それらを類型化しながら動物学的に該当動物を特定する方法を用いた。そして、上記の②榊井本Aに記されている「うを」としてのいわゆる“ぎぎよ”の表現を類別し、表現内容の最大公約数と幕末から明治にかけての庶民の理解状況から、該当動物を具体的に推定した。そのさい、当時の一般庶民が“うを”をどのように認識していたかについては、古文書等を参考にしながら特定を試みた。

“ぎぎよ”の分類

18篇の資料中に、“ぎぎよ”に類する異表記名が23種類、合計54例確認された(図1)。そのうち、「げ」あるいは「け」で始まる表現は16種類41例(75.9%)で、残りの「ぎ」あるいは「き」で始まるのは7種類13例(24.1%)だった。また、「げい」「けい」あるいは「げぎ」「げき」「けぎ」「けき」で始まる表現は40例で、全体の74.07%を占めた。最も多い表記は「げぎよふ」の9例で、2位は「げいぎよふ」の6例、3位は「けいぎよふ」の5例。この上位3種類で全体の37.04%を占めた。しかも、「げぎよふ」はいわゆる16年本にのみ使われていた。

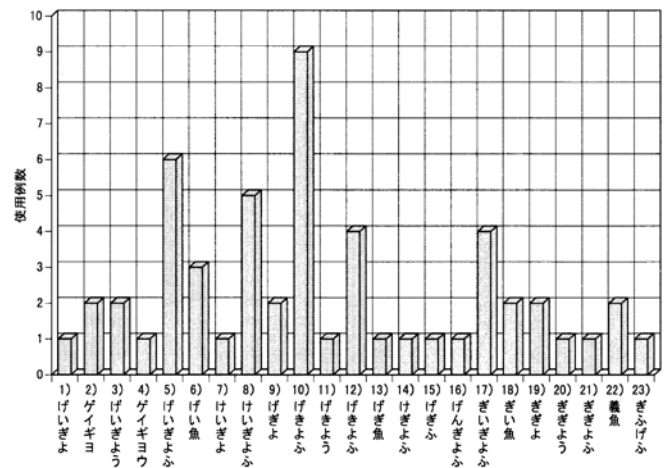


図1 資料中に“ぎぎよ”に関する異表記名と使用例数。

また、“ぎぎよ”に該当する表現を6つのカテゴリーに大別すると、「げいぎよふ」に代表されるような「げい」あるいは「けい」で始まる表現が21例(38.89%)、「げぎよふ」のような「げぎ」「げき」「けぎ」で始まる表現は19例(35.19%)、そして「ぎいぎよふ」のような「ぎい」で始まる表現と、「ぎぎよ」のような「ぎぎ」で始まる表現はそれぞれ6例(11.11%)だった。
[註]

- (1) 佐藤孝則(1996)『『泥海古記』に登場する生き物たち 1.“うを”についての動物学的考察』『研究報告会報』、天理大学おやさと研究所、13:35-47。
- (2) 佐藤孝則(2000)『『泥海』—その発生学的意義』『【元の理】と地水火風〜環境問題を考える〜』、天理やまと文化会議:69-83。